

佐倉市 教育センターだより Vol.4

平成16年10月1日発行／佐倉市教育センター／TEL.043 (486) 2400

▶ 佐倉学カリキュラム開発現地研修会を終えて ◀

国立歴史民俗博物館との連携

1 はじめに



岩淵令治先生

歴博利用学習モデル

- ① 資料提示（導入）
- ② 最初の疑問
- ③ ガイダンス（資料観察）
- ④ 確かな疑問
- ⑤ 問題解決活動
- ⑥ 振り返り

今回の「佐倉学カリキュラム開発現地研修会」の出発点は、一昨年に、歴博の久留島教授と「授業で歴博を使ってみませんか」のビデオ撮影のために、6年生の社会科学習の計画を考えたことに始まります。江戸時代の展示を中心に学習する児童の姿を撮影したのですが、それに続く学習として、佐倉の町で実際に江戸時代（の名残）を発見することを考えました。昨年の研修企画打ち合わせで本年度その構想を取り入れるということになりました。

この研修会では、小学生の学習スタイルを一部先生方にもやっていただく構成にしました。そのため、ガイダンス機能を充実させることを検討し岩淵先生に特にお願いしたところです。

事前の調査を2度も行っていただき、中身の濃いガイダンスをしていただきました。この岩淵先生の姿をこれから児童生徒を指導する先生方に期待するところです。

さて、佐倉市教育にとって、豊富な教育資産の活用が重要な課題です。解決のためにただ見学の回数を多くするとかということではなく学習の過程を重視し、質の高い学習を目指していくことが大切です。

今回、参加された先生方が校内で影響力を持って、カリキュラム開発に取り組んでいただければ幸いです。教科の枠を超えた取り組みや校内の体制づくりが今求められているのです。ちなみに、例示したモデルは、

理科「地層の観察」の学習をヒントに考えたものです。その効果は、担任に指導された当時の6年生がはっきりと示してくれました。

最後になりましたが、研修会の実施にあたっては、岩淵先生、辻先生、広報サービス室の皆様方に多大なるご協力をいただきました。ここに、厚くお礼申し上げます。また、猛暑にもかかわらず、熱心に参加、活動して下さった先生方にも厚くお礼申し上げます。

所長 大野 尊史

2. カリキュラム開発現地研修会から

① 研修会を行うにあたって

佐倉学開始から2年目をむかえ内容的な充実が求められています。そこで、本年の夏季研修会では、「佐倉学カリキュラム開発現地研修会」とし、教務主任・研究主任・特殊学級等の先生方42名の参加のもと8月4日(水)に国立歴史民俗博物館の岩淵令治先生を講師に迎え各学校での取り組みの一助として実施しました。

② 研修概要

今回の研修では対象を「江戸時代」にしほり「城下町の特色や蘭学について」のガイダンスを午前中に実施しました。先生方が個々に選んだテーマに沿って午後から城址公園内の史跡や武家屋敷、商家の街並み（田町・新町）、寺町、武家屋敷/佐倉順天堂/堀田邸等へ実際にカメラ等を持ち、現地に取材に出かけ教材研究を実施しました。先生方の研修に対する姿勢は非常に前向きで意欲的でした。



武家屋敷を訪ねて

③ 研修アンケート・感想より分析

今回の研修会を振り返ってみますと、参加された各学校の先生方は「佐倉学」に関する関心が非常に高く、また、「佐倉学」推進の立場にある先生方であったと思います。非常に熱心にガイダンスを受け、フィールドワークにおいても、デジカメ、ビデオを利用して資料収集を行い大変意欲的な姿勢でした。

また、今回の研修会の内容をどのように活用して行きたいかとの質問に対して全員の先生方からそれぞれの立場での回答があり、素晴らしいと思いました。

一部ですが紹介いたします。

アンケート

Q 1 本日の研修はいかがでしたか。
非常によかった・よかった 93 %
どちらともいえない 7 %

Q 2 ガイダンスの内容はいかがでしたか
非常によかった・よかった 95 %
どちらともいえない 2 %
回答なし 2 %



研修の様子

Q 3 今回の研修会での内容はあなたの学校でどのように活用できると思いますか。

- 自分で実際に歩いて歴史的な資料の場所の確認ができて、子ども達に自信を持って紹介することができる。
- 佐倉の歴史をテーマに学習を進める際に新たな見方、別の角度からのアプローチ等に活用できると思いました。
- フィールドワークの大切さや有効なことを確認できました。教師の意欲化についても有効だと思いました。
- 佐倉市の地形の特色、自然を生かした城下町のつくりを学習することが出来ると思われる。郷土をよく知り愛着を感じるためにも外に出てみる試みが必要だと思いました。
- 書かれた資料だけで理解したつもりでも身に付く知識は頭の中だけです。佐倉の地形を自分の足で確かめて得た知識は、佐倉に愛着がわくと思います。(実際に感じたこと)

〔小山 成志〕

ほっとひといき これも「佐倉学」!

佐倉が一文字でも出てくる本の話

● 内田 儀久 (佐倉市立佐倉図書館長)

私は、佐倉が一文字でも出てくる本を集めている。小説・エッセイなどの単行本であれ、漫画や週刊誌でも、その本のどこかに佐倉に関する文字や、ゆかりの人が出てくれば収集の範囲である。これらの本を総称して、佐倉本と呼ぶが、このように佐倉にこだわって本を集める(読む)ことも、読書法の一つではないかと思っている。

たとえば、小説やエッセイなどで印旛沼という文字をよく使う作家は誰であろうか、と問いかける。ま、そのような集計など誰もしていないから、わからないのであるが、私は椎名誠と思う。あくまでも印旛沼という文字であるが5冊の本に書かれている(題名は省略)。佐倉に関する本を収集していると、そのようなことが言える。

また、夏目漱石の「三四郎」には「深見さん」という人物が出てくる。この人物は、佐倉にゆかりのある近代洋画家の先駆者浅井忠と知って読むと、いっそう味わいが出てくる。漱石は忠と友人であり、二人を介した人物は正岡子規といわれている。そして、正岡子規に短歌を学んだ人が、佐倉ゆかりの金工家香取秀真であり、秀真の家の隣は芥川龍之介が住んでいた。だから、芥川龍之介の「東京田端」には秀真が描かれている。作品を通しての人のつながりがわかってくる。

このように佐倉という文字を探して本を読んでいくと、新しい読書の楽しみ方ができる。それは、ふるさとを発見する楽しみである。子ども達が、自力で、ふるさとの文字を探したときの喜びが思い浮かぶ。

※ この本について詳しく知りたい方は
ホームページ「佐倉と印旛沼」のアドレス <http://www3.ocn.ne.jp/inba/>

不登校対策に関する調査の結果から

平成14年の佐倉市の不登校の出現率と国・県の不登校の出現率を比較すると小学校は下回っていますが、中学校は少々高い出現率となっています。不登校は、特定の子どもに特有の問題があることによって起こることとしてではなく、どの子にも起こりうることとしてとらえ、当事者等への理解を深める必要があります。しかし、不登校という状況が継続することは、本人の進路や社会的自立のため望ましいことではありません。また、豊かな人間性や社会性、生きて働く学力を身につけるなどすべての児童生徒がそれぞれ自己実現を図り、社会の構成員として必要な資質・能力の育成を図るといふ義務教育の趣旨から考え、その対策を検討することが必要であり、改善しなければならない教育課題です。

そこで、この課題の解決の資料とするため、不登校対策に関する調査を本年5月に実施し、分析しました。不登校に関し網羅的な調査でなく、市内小中学校でどのような対策がとられているか、またどのような対策が有効的であるかを考えることを視点として調査しました。

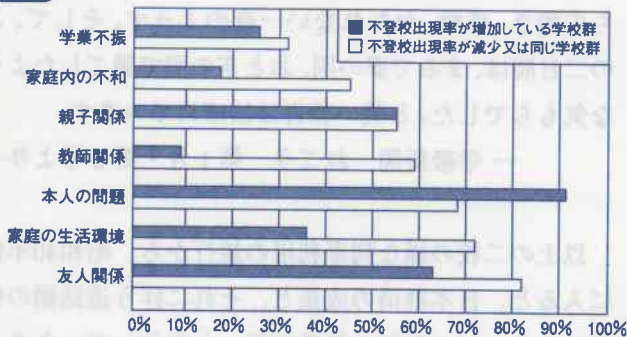
この調査では、具体的な不登校対策の有効性を探るため、平成14年度と平成15年度の不登校出現率を比較

し不登校出現率が増加している学校群と不登校出現率が減少又は同じ学校群について、比較しました。まず、不登校の原因をたずねる項目では、不登校出現率が増加している学校群では本人の問題であるとの割合が多いのに対し、不登校出現率が減っている学校群では、友人関係、家庭本人、教師関係、親子関係に原因があると考え目を向けていることがわかります。〔資料1〕

次に、不登校対策では、不登校出現率が増加している学校群は、会議や学級編成の工夫、保健室や相談室での対応、カウンセラーや心の教育相談員の活用の割合が高いことがわかりました。不登校出現率が減っている学校群は、不登校出現率が増えている学校と比較すると個別の学習指導、苦手意識の克服や自己有用感存在感を身につける指導、教育相談、職員研修の割合が高いことがわかりました。〔資料2〕このことから、不登校出現率が減少している学校群は、不登校の原因は多くの事に目を向け、予防的な不登校対策が多くとられていること、不登校出現率が増加している学校群は、カウンセラーの活用や会議など対処的な対策がとられていると考えられます。

資料1

不登校の原因

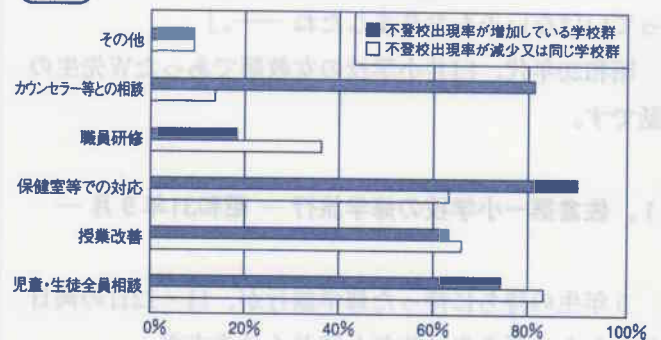


他にもこの調査の結果から言えることを何点か述べたいと思います。中学校の不登校出現率が小学校のそれに比較し大幅に増えることは、国、県、市のいずれの調査でもわかっています。不登校をを防ぐ手立てとして、小中学校の連携がありますが、今回の調査の中では、小中学校の連携の点で、きめ細かい情報のやり取りがなされていないことがわかりました。例えば欠席数の伝達において、その数を伝達するだけではなく、「不登校に関する経験の有り無し等、その予備軍といえる児童について」の情報の伝達等を詳細にしていく必要があるのではないのでしょうか。

また、夏休み後に不登校児童生徒が増えることから、夏休み前の児童生徒全員の教育相談は取り組んでいる学校も多いですが、すべての学校で取り組んで欲しい対策です。他にも学級編成の工夫であるとか、授業改善等の有効的であると思われる予防的な対策をとっていくことが大切です。不登校に関する研修について、毎年必ず行っている学校は少ないことがわかりました。他の研修、例えば生徒指導の研修と併せて事例研修をしているところが多いようです。不登校者数が増加している学校などは、緊急の教育課題として、研修をする必要があると思われます。

資料2

不登校を未然に防ぐ取り組み



さらに、「中1不登校 生徒調査-不登校の未然防止に取り組むために-」の周知については、職員の少数しかしないの割合が高いことがわかりました。この調査は、中学校1年時における不登校の急増の背景を探り、今後の対応についての検討を行うための基礎資料を収集することをねらいとして行われており追跡調査をもとにかなり有効かつ具体的な手立てや小中学校別対応の具体的取組みも紹介されています。不登校対策の基礎資料として、平成15年5月に文部科学省から通知されている「不登校への対応の在り方について」と併せ、是非職員研修で取り上げていただきたいと思えます。

不登校は、その要因・背景が多様であることから、学校のみでは解決することが困難な場合も多い課題です。しかし、学校においても有効な対策をとることにより改善が図られることも事実です。そして、これからの不登校対策は、不登校児童生徒が出てから対処するだけでなく予防的な対応が重要です。各学校に配布した本調査分析報告や不登校対策チェックリストを各学校で活用していただくことにより、不登校に関する取り組みの一層の充実が図られることを願っております。

〔沼田 正信〕

佐倉市学校教育の 過去・現在・未来

～修学旅行の変遷と現状～

その2

昭和20年（1945）8月15日終戦を迎えた日本は、焦土と荒廃混迷の中にありました。そのような中であっても修学旅行は、いち早く行われたようです。

「——まだまだ日本全体が貧しい時代で、修学旅行に行けない子が何人かいました。そして修学旅行に行くのには、お米を持っていくのですが、そのお米を持っていけない子もいましたね——。」

昭和20年代、臼井小学校の女教師であったW先生の話です。

1. 佐倉第一小学校の修学旅行 — 昭和31年9月 —

6年生の待ちに待った修学旅行が、11・12日の両日行われた。行き先は昨年と同じく日光方面。

第1日は東照宮・植物園。少し雨に降られたが、それでも大よこび。参観を終わり、ケーブルカーで中禅寺湖畔へ行き橋本旅館へ泊まる。夕食をとり床についたが、なかなかねむれず大さわぎだった。1時頃に起きて歯をみがき出すそそっかしやもいた。

第2日は菖蒲ヶ浜・龍頭の滝・養魚場・華厳の滝のコースで、なにか社会の束縛から解放され、自然にかえったような感じだった。

幸い車酔いも少なく、事故もなく、全員無事に帰校した。

— 佐倉第一小学校新聞第46号より —

2. 根郷小学校の修学旅行 — 昭和32年5月 —

6年生は5月23・24日の2日間、小学校最後の思い出に国立公園、箱根に修学旅行に行きます。参加人員

は、全員79名、引率職員は、校長・六崎・校医池・大川・大野・高埜・担任綿貫・石渡の各先生方です。

コースは、5時22分佐倉発 — 千葉 — 東京 — 小田原 — 強羅 — 早雲山 — 大涌谷 — 芦ノ湖（船） — 元箱根（一泊） — 十国峠 — 熱海 — 東京 — 千葉 — 佐倉5時54分着の予定です。

宿泊所は、芦ノ湖畔「杉よし旅館」です。現地の模様は次号で詳しくのせます。

車窓から

風かおる5月、私たち6年生全員あこがれの地箱根へ。朝早く、佐倉を後にした私たちは千葉、東京で乗り換え、小田原に向かいました。

車窓からは美しい景色がうつっては消え、後へ後へと流されていきます — 略 —

登山鉄道、大涌谷、夢の遊覧船、いこいの宿「杉よし旅館」、箱根よさようなら!の小見出しのもと子どもたちの驚き、感動、ねむれない一夜のようす、そして、この二日間は、まるで夢の国、おとぎの国で過ごしたような気持ちでした。と長い報告は結ばれています。

— 学級新聞 ねごう 第1号・第2号より —

以上の二校の様な列車利用の旅行から、昭和40年代に入ると、日本経済の成長と、それに伴う道路網の整備により、バス利用の修学旅行へと変化していきました。行き先は、箱根方面が主で、何校かは日光方面だったようです。

3. 小竹小学校 — 昭和55年 ホワイトスクール —

昭和55年小竹小学校が創立され、その年、豊かな人間性を育てる教育をめざす教育課程の改訂もありました。小竹小学校は、いち早く少年自然の家利用のグリーンスクール、ホワイトスクールを実施し、それにならない市内の小学校の修学旅行も大きく様変わりしていきました。

紙数が無く小学校のみにふれましたが、いずれの旅行でも、児童にとってはこの上ない楽しみであり、思い出です。

〔渡部八重子〕

シリーズ 実践

「わかる授業、たのしい学校づくり」～ ◆ 佐倉東中学校の実践

佐倉東中学校では全教職員の共通理解のもと「わかる授業、楽しい学校づくり」を求め授業評価を起点として、保護者や地域の方々をも巻き込み学校評価を実施しています。年度途中ではありますが、すでに授業評価を実施しての結果、改善された点も示されています。矢崎聖二校長先生、品地敏明教頭先生に伺いました。

1 学校評価等の年間計画と授業評価票

月	主な学校評価	随時評価	説明や公表等の機会
4	評価計画の作成	避難訓練 家庭訪問	授業参観、PTA総会、学級懇談会で説明 教育計画一覧表、学校だより
5	学校運営課題検討(学校評価委員会)		家庭訪問
	PTA役員会 佐倉市530運動		
6	教育懇談会(学校評議員会) 生徒・教師による授業評価		PTA運営委員会説明
7	生活・学習自己評価 PTA学級懇談会 生徒による授業評価 1学期学校評価(職員)		学級懇談会で説明 通知票 教育懇談会(学校評議会) 内容公表
	学校評価全大会(全職員)		

■ 生徒による授業評価票

■ 教師による授業評価票

授業について

教科名 【
年 組 氏名

今までの授業についてお聞きします。みなさんと共に楽しく分か
つくるために役立てていきたいと思ひます。それぞれの項目につい
て、項目によっては、要望や意見があったら記入し、その理由も書き
込んでください。

○授業から

1 授業内容は理解できましたか
① 理解できた ② 比較的理解できた ③ やや理解できた

2 黒板に書かれた文章や図などは
① 見やすい ② 比較的見やすい ③ やや見にくい ④

3 授業で何を学習するかははっきりしていますか
① いつもしている ② 比較的している ③ 時々されない

4 先生は教え方(黒板・機器・資料など)を工夫していますか
① いつも工夫している ② 時々工夫している ③ あまり
④ 工夫していない

5 先生の話し方は
① はっきりして聞き取りやすい ② 比較的聞き取りやすい ③ や
④ 聞き取りにくい

6 先生からはげましや声かけがありますか
① よくある ② 時々ある ③ あまりない

7 その他、授業に対する要望・感想などがありましたら、自由に書いて

○自らの学習活動を振り返って

1 家庭学習は
① しっかりできた ② ほぼできた ③ あまりできなかった

2 持ち物の用意は
① しっかりできた ② ほぼできた ③ あまりできなかった

3 わからないことは、先生へ積極的に質問などして解決に努めること
① しっかりできた ② ほぼできた ③ あまりできなかった

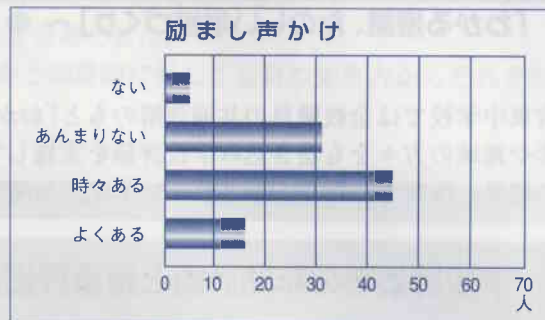
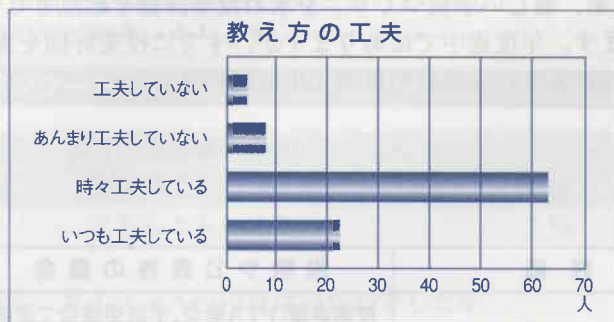
7月=教員授業評価票

4: そうである 3: どちらかと言えばそうである 2: どちらかと言えば違う 1: 違う

評価視点	評 価 項 目
教材の選択	教科書を十分に活用している。
	副教材(資料集・問題集)の選択は、その内容や種類に関し、学習の目標や生徒の 力に照らして適切である。 教具・教育機器等を有効に活用しようとして工夫している。
指導内容	授業にはいつも十分な準備をし、実施している。 生徒が学ぶ力や考える力を伸ばされるように、授業を工夫している。
授業展開	授業の進度は、指導計画に照らして適切である。 小テスト等を適宜実施し、生徒の理解度や到達度の把握に努めている。
指導形態	生徒の理解を促すように、発問や板書を工夫している。 授業のなかで、生徒一人一人が活躍できる場を設けている。
コミュニケ ーション	授業内容に関する生徒の質問については、十分な対応をしている。 生徒とのコミュニケーションは授業及び諸々の教育活動のなかで十分にとっている
学習態度	授業に集中し、自ら学ぶ姿勢が見られる。 予習・復習等の家庭学習にしっかり取り組んでいる。 与えた課題等をきちんと提出している。 ノートを丁寧に使っている。 検定など資格取得に向けて意欲的に取り組んでいる。
思考過程	単に記憶するのではなく理解するように考えさせている。 授業中は、予想される疑問点を解消するよう考えさせている。
学習反応	発問や課題に対して積極的に取り組んでいる。 自己の進路に対して意欲を持って学習に取り組んでいる。

2 生徒による授業評価の結果より（サンプルとして2例提示）

指導方法の工夫は高い評価を得ている。それに比べると、励まし、声かけには低い評価も見られる。



※教師が考える授業と生徒が感じている授業には差異があり、その差異を的確につかむ所に授業評価の意味があると考えられる。

3 教師のための個人目標評価

教職員個々が、授業改善や自己研修すべき点を見直し、個人の努力目標を掲げ、校長の指導のもと教科会議や学年会議でフォローを受けながら年度末評価に結びつける。

■個人目標評価表（教職員）

区分	個人目標		教科会議フォロー		年度末評価	
	目標項目	具体的方策	進捗率	説明	達成水準	説明
授業改善					H	
			%		M	
					L	
自己研修目標						

H：目標をかなり上回っている M：ほぼ達成 L：かなり下回っている

4 成果と課題

(1) 成果 ↓

① 教職員の意識と行動の改革

「本校の教育方針の明確化」「生徒・保護者・地域の現状把握」等の課題を職員に公表することで、組織の一員である自分の問題として捉えるようになるなど、教職員の意識に変化が見られるようになってきた。

② 教育実践の改革

目標達成を意識した日々の教育実践となり、職員会議等において論点の焦点化が図られ、迅速な問題解決ができた。具体的には○日々の授業改善の実施（生徒から授業中教師による声かけや励ましが少ない）○生徒指導上の問題に対する協力体制の充実○奉仕作業に対する地域との連携の充実○学校施設・設備の点検と改善の充実○教育環境への意識の高揚と職員によるボランティアサービス（生徒との協働）

(2) 課題 ↓

① 学校評価の生かし方を探る必要がある。

② 学校評価項目の検討と課題解決に向けての方向指示機能を発揮できるようにする必要がある。

（担当 小長井博子）